

1. 学校現場における授業実践研究の課題と展望

－実践的研究者としての教師の取り組み－

岐阜市立長良小学校 芳賀雅俊*

1 「個人研究」体制

本校着任早々、耳慣れない言葉がいくつも空を飛んだ。まるで何を言っているか分からない、異境の地に來た心地になった。

その中のひとつが「ふろしき理論」という言葉であった。

先輩先生：ふろしきをどこでもいいからつまんでみなさい。

私：？

先輩先生：端っこでもいいし、裏でもいいから。

私：(おそろおそろ、真ん中よりややずれたところをつまむ。)

先輩先生：よし、じゃあ、持ち上げてみなさい。

私：(おそろおそろ、持ち上げる(つまみあげる)。)

先輩先生：ふろしきは全部ついてきただろう。

私：(どうのこと?)

先輩先生：これが長良小の研究体制なんだよ。

私：????

先輩先生：ふろしきは、子どもだ、長良小だ。どこをつまんでも全体がアップする。

ふろしきは、教科(研究領域のことを指す)だ。どこを研究したって全体がアップする。どこをつまんだっていいから、自分でつまむところを見つけるんだな。

私：!!!

本校は「個人研究」で研究主題を追求する。一見バラバラに見えるが、このふろしき理論によれば、どこを研究したって、何を研究したって、子どもたちは高まるという信念を持つことが必要なのである。個人研究体制というのは着任前から聞いていたが、あまりピンとこず、その重みには全く鈍感であった。しかし、このふろしき理論を聞いて、顔が真っ青になった。学校全体の研究主題はあるものの、それに沿って各自が自分の専門教科で、研究テーマを打ち立て、実証していかなければならないのである。同じ専門教科の先生であっても、教科部として同じ仲間であっても、その中でまた別々の研究テーマを打ち立てていくのである。個人というのは、独力(今、私は、決して独力ではなく、多くの方の支えがあってこそという感謝の思いにたっちはいるが)

*平成18年度12年目研修教員

でということである。個人研究だから自分が好きなことに打ち込めるのだといえば響きはよいが、それは全ての責任を自己に負うということなのである。とにもかくも、自分がやりたいことを自分で見つけるということは、できそうでなかなかできない話である。逆に、今までは、学校の組織の流れの中で、自然と流れに乗ってやっていた、自分だけの力ではなく、多くの人の支えがあってこそ研究をやってこられたんだということに気づき、自分の非力さにも痛感させられたのである。

このような「個人研究体制」は本校独自の体制である。では、なぜこのような体制があるのか。以下に本校出版の「逞しく生きる」から抜粋して紹介する。

<長良小学校の伝統>

「逞しく生きる」

～第四章長良小の教育を創る一教師のたくましさ「個人研究」～（抜粋）

教科の研究は、本校職員が伝統の上に立って最大に力を注ぐ研究である。もちろん、小学校の教師である以上全教科に精通し、学級経営をふまえることに異論はない。しかし、教育者としての自分自身を掘り下げる執念を一教科に凝集する。自分の専門教科を正面に据え、それをどこまでも深める姿勢を求めるのである。

私たちは、常に、「子どもがどうであるかは、教師がどうであるかである。」と自らに問いかける。それは、一人ひとりの教師が専門教科を磨き、それをもとに教育観を打ち立て、厳しく教師自身の確立を目指すのが長良小学校の伝統であり、「たくましい教師のもとでこそ、真にたくましい子どもが育つ。」と考えているからである。

教師個人は、研究主題「たくまさを培う教育」（※本書は、平成2年に刊行されたものであり、本研究主題はその当時のものである。しかし、平成19年度より研究主題は偶然にも、いやなるべくして「たくまさを培う教育」と当時と同じものになった）をふまえ、一人ひとりが自分の研究テーマを掲げ、教科部研究を中核にして追求する。

- ①自分の専門性を生かし、教科の立場から研究（個人）テーマを設定する。
- ②研究（個人）テーマに即して、教科における基礎・基本と指導内容の系統を明らかにする。
- ③指導内容に関わる子どもの実態を直視し、子どもの論理を見極め、確かな力をつける指導法の工夫をする。
- ④自分の考えをもち、互いに磨き合い鍛え合う学習姿勢を育てる工夫をする。
- ⑤実践を通して、子どもの分かり方を分析し、指導内容の系統を見直す。
- ⑥研究（個人）テーマは、自分のライフワークとなるものとして設定する。

等、教科の本質、子ども理解の上に立った指導法の確立を中心に据えながら、専門教科を核として自らの教育観を打ち立てよう努めている。

これらの実証を掲げて、長良小学校職員全体の前で問うのが、全校研究授業（全研）である。

ここには、「これが、今の私の全てである。」というものが全研内示資料、授業を通して示され、研究会は熱気にあふれる。

全校研究授業は、八教科および道徳、特殊教育の年十回とし、研究会は、全研内示会をふくめ四時間である。授業者も他の職員も、全校研究授業を節目としながら伸びていく。

長良小職員が、古くは「野武士のごとき」と謳われたのも納得できる。

いずれにしても、私の場合、専門教科（領域）は道徳であるので、道徳の本質、子どもの理解の上に立った指導法の確立を中心に据えて、自らの教育観を打ち立てていかなければならないのである。武者震いどころか、身震いのする思いである。

2 子ども理解—研究テーマを立ち上げる—

とにもかくにも、一体どんなことをしたいのか。やりたいことを自分で見つけるということほど、苦しいことはない。しかし、本校のいいところは研究したいことが見つかるまでは、研究テーマの設定をしなくてもいいというのが暗黙の了解になっているところだ。他の教科部では、研究の設定にずっとものがき続け、研究発表会には仮のテーマだけ設定し、ついぞ、転出する最後の年に「これだ！」と見つけた方もあると聞く。その方は、その後転出された学校でも、その研究テーマをライフワークとされ、実践をすすめたそうである。

「どんな子どもを育てたいのか。どんな道徳授業をしたいのかでは、狭すぎる。もっと、子どもを見て、子どもの姿から見つけろ。」

幾度も先輩の先生から御指導いただいた言葉である。

子どもの姿をじっと見つめたところで、見る目がないのだから、ちっとも見えてこない。しかし、ある日の休み時間にふと、こんな姿の子どもが目にとまった。

【電気系のM子のしごとぶり】

M子は、すすんで電気のスイッチを切ったことをきっかけに電気系になった。
仕事に対しては前向きではあったが、忘れてやれないことも時々あった。ある日の15分休み（行間）に「なかよし遊び（クラス全員で一緒に遊ぶ）」をするために、全員が急いでグラウンドへ出ようとしたときのことである。
昇降口をちょっと出たところで、(a) M子が何やらグラウンドへ出ていくことを躊躇するように立ち止まっていた。足踏みをしながら困ったような表情であった。そして、私と目が合うとさらに困った顔を始めた。何かを訴えたいような目をしていて。そこで、「どうしたの。」と声をかけると、教室を指さして、「(電灯を)消すの忘れちゃった…。」と答えた。「ああ。」ととっさに適切な考えが浮かばず、曖昧に答える私を見て、(a) M子はもう一度考え込んでしまった。
しかし、グラウンドでなかよし遊びをやり始めた仲間を見てから、(b)「消してくる。」と勢いよく私に言い残し、くると向きを変え、走って教室へ戻っていった。
(c) 再びグラウンドに出てきたM子の表情は、すがすがしく、いつになく全力でなかよし遊びをしている仲間のところへ走っていった。

「消してくる。」といって一目散に教室に駆け上がっていた後ろ姿、急いで戻ってきて少しでも仲よし遊びに加わろうと全力でかけだしていった姿があまりにも天晴れで、あっけにとられ、心地よささえ感じた。「これだ！」とひらめいた。

そこで私は、M子のこの時の姿を分析することにした。

◇二カ所の(a)の波線部の姿について

当初、私は、M子が「係の仕事をしなければいけないな。でも面倒くさいな。」という思いがあったと分析していた。端的に言えば、やるかやらないかで迷っている姿だと捉えていた。そのことになんの疑いもなかった。しかし、先輩の先生方からは、「M子はそんなことは思っていない。」

と一蹴された。

私は、M子の姿を再分析した。そこで分かったことは、下記のようなことである。

【新たに分析したM子の思い】

①係の仕事をやらなければ。

②なかよし遊びにも行かなければ。

この二つを両立させようという思いがあったからこそ、(a)のような躊躇するような思い悩む姿があったのだ。それゆえに、(b)のような「勢いよく教室に戻る」姿が生まれた。

当初、私はM子は、「①と②のどちらにしようか。(そして、その判断の基準を《しかられたくない》《どっちが楽かな》などという利害打算による思いと分析していた。)」という二者択一しようとしていた迷いと捉えていた。しかし、そのような迷いではなく、「何とか両立させよう。」と必死にもがいて、どうすべきかを模索していたのではないかと捉え直すことができた。

つまりは、「人間は常によりよく生きたいと願っている。」という道德の基本に確信を持ったのである。

私は、今までM子のような何かことを為す前に「立ち止まる姿」を肯定的に見ることができていなかった。それゆえに、道德の時間では、子どもの意見の裏側にある思いや資料中の主人公の生き方を正しく捉えることができていなかったのである。

思えば、即断即決してしまうようなことは、道德的態度や習慣が身に付いている場合と思慮が浅い場合が多いのではないだろうか。特に後者の場合は道德と相反するものである。また、悩みや立ち止まり等を必要としない場合もあるかも知れない。私たちは、悩み立ち止まる時こそが、道德の始まりではないだろうか。(これは、例えば低学年時によく見られる傾向のやってみながら考えるという実態と反するものではない。低学年の子たちはやってみて体で働きかけながら体ごと「ちょっとまてよ。」という思考の営みをしているのである。つまり、体丸ごとで考えるのと頭の中で考えるかという違いである。)もう少し平たく言えば、「ちょっとまてよ。」と思えた時こそが道德の営みを始めたときではないだろうか。そして、このような日常的な「ちょっとまてよ。」という思考の営みを道德の時間で補充・深化・統合していくことが大切ではないか考えた。

◇ (b) の波線部の姿について

(b)の姿こそ、私が求める生み出したい姿である。先述の(a)は、(b)の姿を生み出すための必要条件である。(a)の姿があったからこそ、(b)が生まれたのである。それでは、(b)を生み出す決定打は一体どんな思いだったのだろうか。

まず、(a)のことを私は、先に「模索」という言葉を使った。「躊躇するような思い悩む姿」という言葉も使った。私は、この時のM子の思考の営みの様相が、真っ暗闇の洞窟で出口を探すためにあたりを手探りで巡りまわって、そのあげく、やっとかすかな光を見つけて出口を見出したような姿に思えた。かすかな光とは何だろうか。そこに「希望」という言葉が私の中で浮かんできた。希望は不安とのパラドックスにある。不安なときにもつものが希望である。また、希望を厳密に言うとは見出すものではなく、不安と正対したときに、自らの内に湧き上がってくるものである。M子の場合、どちらかの行為に選択していれば、どこかに一点くもりを生じていただろ

う。なんとか自分のできる限りで精一杯（両立させるために全力でかけ上がり、仲間のところにも全力で走り戻っていく）やることで、「そうすることでスッキリできそうだ。」というような思いに至ったと考える。つまり、「どちらも大切だから両立させるために自分のできることを精一杯やろう。」という思いがM子の見出した希望だと捉える。

「この（光の感じる方向に）先に行けばよりよいことが起こるに違いない。」という思い。道徳におきかえるならば、「こうすればよりよくなれるに違いないという自己への信頼」このような思いこそを私のいう希望と定義して、希望を持つ子を育てたいと願った。

このことから、私は、研究テーマを

希望に満ちて生きぬく子を育てる道徳指導

と設定することができた。

◇ (c) の波線部の姿について

全力で走る姿は、見出した「希望」に、「よりよくなれるんだ」という内にみなぎる明るさをいっばいに表現している姿である。見出した希望に対して、自分の体いっばいに表現することで、希望が内の中に定着していくと考えた。

M子の姿から、私は、目指す子ども像を見出し、研究テーマを打ち立てることができた。赴任して一年間が過ぎようとしていたときのことであった。あとは、実践、検証していくばかりであるが、研究テーマの産みの苦しみにも増して、実践で苦しむことになった。時には、「本当に希望など、検証できるのか。」「このテーマでよいのか。」と振り出しに戻られる思いになったことも幾度もあった。

しかし、三年後。二年生だったM子を偶然にも六年生になってもう一度担任させていただけることになった。このM子がある日の道徳の時間に次のような発言をしたのである。

【M子の発言】

主人公が、じっと刺しゅうを見つめていたってあるでしょ。このじっと見つめていたときに、私は、主人公は、色々考えたと思うのね。そして、正直に言おうと告白できたと思うの。私は、正直に言った主人公はすばらしいんだけど、言う前にじっと見つめて思い悩んだこともすばらしいと思います。だって、悩んだんだから。

私は、M子が思い悩むような迷っている姿をよい姿だととらえていることに、三年前の私の分析に大筋間違いはなかったことを確信した。そして、改めて、「希望」をテーマとして、実践をすすめていくことに自信をつけた。

尚、この発言を聞いた他の仲間は、「すぐに正直に言うことがすばらしいのに、中々言わずにじっと見つめているなんてどこがいい姿なの。（じっと見つめているとき、主人公は言わなくてはいけない、でもバレルのがいやだから言いたくないなどの弱い思いで迷っていたと考えているのであろう）」と反論をした。私は、このような多くの子たちがいずれM子のようなとらえ方をしていくことができるようになれば、この研究が有効であると言えるものになるだろうという、ひ

とつの指標をもった。

3 研究テーマを具現するための具体的方途

M子の姿を道徳に置き換えて整理してみた。

この希望に満ちた姿が生まれたのは、(a)で思いを張りめぐらした末、(b)でよりよく生きる希望を見出したからだと考える。

そして、研究主題の願う子どもの姿に迫るためには、M子の姿 ((a)思いを張りめぐらして、(b)よりよく生きる希望を見出し、(b)希望にひたる姿をもとに指導過程を仕組んでいけばよいと考えた。

その結果、次のような【仮説】を立てた。

道徳的な場面において、自他の立場から多様な思いを張りめぐらし、よりよく生きられるという自己に対する信頼からよりよく生きる希望を浮かび上がらせ、さらにその希望にひたる指導を行えば、希望に満ちて生きぬく子が育つだろう。

この仮説に基づき、具体的に次のような授業構想を立てた。

【授業構想】

指導過程	めざすこと	手立て
(a)思いを張りめぐらす過程	<ul style="list-style-type: none"> ○主人公が張りめぐらした様々な「思い」や「感じ方」を見つめることができる。 ・広がりや深まりのある「思い」や「感じ方」を見つめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①主人公が思いを張りめぐらしている場面での主人公の生き方を見つめさせる。 ②主人公が思いを張りめぐらしている「言動・表情・しぐさ」などを明確にし、主人公のおかれた立場を感じ取らせる。
(b)よりよく生きる希望を見出す過程	<ul style="list-style-type: none"> ○よりよく生きる希望を見出した主人公の真のすばらしさを感じ取ることができる。 ○自分への思いを深めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ③主人公がよりよく生きる希望を見出した瞬間を象徴するものや事柄を明確にし、主人公の見出した希望のすばらしさを感じ取らせる。 ④それまで子どもたちが見つけてきた思いを揺るがす発問をし、自己の生き方に語りかけるようにする。
(c)希望にひたる過程	<ul style="list-style-type: none"> ○見出した希望を自分自身のもので定着させることができる。 ・生き方へのあこがれ ・新たな自己の発見 ・内在する自己のよさの再発見 ・自己のやるべきことの自覚 ・自己の行為の満足感 	<ul style="list-style-type: none"> ⑤主人公にとって、自己の希望を象徴するものやことがらを投げかけ、自分なりに受けとめさせる。 ⑥見出した希望が自己にとってどういう意義があるのか考えさせる。

研究テーマを生み出し、仮説、授業構想が設定されるまでを述べてきたが、仮説と授業構想は実践の度に、省察し、修正されている。特に指導過程とその手立ては、あるときには有効であるが、あるときには当てはまらないものがあり、一般化できる研究をしていくというのは本当に大変であり、自分の研究は自己満足に陥っているのではないかと悩むこともあった。

4 研究推進の具体的方途と体制

次表は、私の年間計画である。私の場合、今年度は全校研究会は行わなかった。(昨年度と一昨年度2年連続打たせていただいたため。)本校は、教科部を核として、研究を自分で進めてい

く気風がある。部研の打つ時期や回数には全くしぼりがない。私は、『月一回の公開授業』を自分に課してすすめてきた。また、拡大部研は、校外より講師を招いて指導をいただく部研である。残念ながら、私の場合、道德部と言っても一人しかいない。

【平成19年度】

月	計画内容 と見通し	研究会等
4月	・道德の時間の学び方の定着指導 ・子どもの実態把握	
5月	・今年度の重点の確認	拡大部研
6月	・中学年における希望の見出し方の特性把握 ・指導過程と資料との関わりの分類	拡大部研
7月	・紀要（6月から）に記入する資料で実践 ・価値分析と資料解釈の関わり	拡大部研
8月	・先輩からのご指導 ・発表会「窓ガラスと魚」本時の指導案作成	夏季先輩との会
9月	・紀要の作成と検討	拡大部
10月	・今までの成果をもとに授業実践 ・発表会を想定した資料で仮説と手立ての検証 ・中間研	拡大部研
11月	・中間研の振り返り	拡大部研
12月	・(c)希望にひたる過程における教師側の評価	拡大部研
1月	・3の視点での資料解釈と価値解釈	拡大部研
2月	・各指導過程での手立てのあり方 ・2の視点（信頼・友情）の資料解釈と価値解釈	拡大部研 同士の会
3月	・実践のまとめ。 ・次年度の課題を明らかにする。	

そのため、道德部OBの方（先輩）をお招きして部研を打ってきた。先輩方は、長良小を転任されたあと、まさに岐阜県の道德を導かれ、行政や学校現場など、様々なところで指導的立場におられる方々ばかりである。先輩からの御指導には、毎回目を開かされることばかりである。

また、先輩方が打ち立ててきた研究テーマと私のテーマはまるでちがってはいいても、道德の本質

と確かな子ども理解の上に立っておられるので、まるでブレがない。こちらが目指したいことを尊重して、方向を示してくださることもありがたい。

本校は、研究発表校としての使命も担っている。三年に一度の本発表で、提案授業をするのだが、他の年度も中間研究発表会として授業を公開している。本発表の分科会では、自分のありのままを主張し、参観者に研究の有効性を問うのである。

先輩方の御指導は、専門的である。（本質的であるといった方がよい。）したがって、自分の研究も専門性が増してくる。逆に、専門用語がちりばめられ、他の教科の先生方に伝わりにくくなったり、分かりにくいものになってくる場合もある。しかしながら、子どもを軸足にしていれば、「使っている言葉はちがうものの、なんか共通しているところがあるな。」と思えるところも出てくるようになった。職員同士が互いにそういう思いに立ったとき、真の意味でも、個人研究体制でも切磋琢磨できるのであろうと考えている。

今後、子どもを軸足にした観点での研究会をこそ大切にしていかなければと考えている。なぜなら、研究は子どもの成長のためにあるからである。具体的には、授業における子どもの姿と理論を重ね合わせた議論が必要になってくる。今、自分も「この時の子どもの姿から～」と発言

するようにしている。そうすることで、いずれ、たくましい教師集団を生み、たくましい子どもが育つと考えている。